

# 灰色のマリエ

Main Character  
登場人物  
紹介

オーロール

エヴァラードと関係を持つ、  
美しい未亡人。

モリーヌ

マリエの義姉で、良き相談相手。  
二歳になる息子がいる。

ハリイ

エヴァラードの同僚。  
明るく真面目な性格。

ヴァリアン

エヴァラードの祖父。  
病に侵されていて、  
床に伏せている。

エヴァラード

「祖父が身罷るまで」  
という条件のもと、マリエの夫となる。  
見た目はいいが、  
性格は冷淡。28歳。

マリエ

辺境の町から王都へ嫁いできた。  
親しいもの以外、灰色に見える  
不思議な体質の持ち主。20歳。

もくじ

灰色のマリエ

君に贈りたいもの、  
もしくは君から欲しいもの

灰色のマリエ

## 1 マリエの見る世界

マリエの見る世界は二つ。

一つは多分、自分以外の人たちが見ているものと同じ、天然色と人工色に彩られた普通の世界。そしてもう一つ――

それは、

様々な濃さの灰色で彩られた、不思議で不安な無彩色の世界。

二つの世界は、常にマリエの視界に同時に存在していた。

幼い頃のマリエ――マリエンティーナ・ルベールは、自分の世界が二つあることをなにも不思議に思わなかった。

大人たちには時々妙なことを言うと思われたかもしれないが、いくらエイティスの国情が安定しているとはいえ、辺境での暮らしは厳しかった。だから、誰もそんなことに注意を払わなかったのだ。

視界がとどころ灰色に見えても生活するのに不便はなかったし、家族も友だちも自分と同じ

なのだろうと思っていた。広大な辺境の、見知った人間ばかりに住む狭いコミュニティでは、ものや人が灰色に見えることはほとんどなく、時々知らない人が灰色に見えるのは、自分がその人のことをよく知らないせいだとマリエは納得していたのだ。

マリエが六歳になったばかりの頃、父親が山の滑落事故で亡くなった。

それは荒野に激しい雨が降る季節のことだった。弟のレストレイは二歳、一番下の妹ユーリエは生まれたばかり。母がずっと泣いていて、祖父がしきりに慰めていたことはよく覚えている。マリエも悲しかったが、あまりに幼かったので、記憶は鮮明ではない。

父は真面目な人で、ギリギリの収入を補うために外で働くことが多かったから、遊んでもらった思い出は少なかった。しかしその分、祖父が初孫のマリエをたいそう可愛がってくれた。それゆえ、父親が亡くなったとき、さほど寂しくはなかった。祖父は大柄で大らかな性格の人だった。

父が死んでしばらくすると、家族は悲しみを埋めるように日々の暮らしを再び始めた。そうして日常が積み重ねられてゆく。

変わりばえのしない毎日、それがマリエの日常だった。

マリエは自分のことを優れたところもない代わりに、特に劣ったところもない平凡な人間だとずっと思っていた。

しかし八歳になったとき、ある出来事が起きてマリエは自分が少し人と違うことに気がついた。

それは彼女の住む小さな町に、王都から若いご婦人がやって来た日のことだった。

広場は、この小さな町のどこにそんなに人がいたのかと思うほどごった返し、みんな嬉しそうに晴れ着を着こんでいた。マリエの家は駅前まへに小さな土地を持つていたので、そこに建っている古い物見の塔から、家族や友人たちと広場を見下ろすことができた。いわば特等席である。

そして、向こうの方から見たこともない美しい黒塗りの車の行列がやって来て、広場で停まった。歓声の上がる中、あるご婦人がゆっくりと降り立った。彼女は濃い髪色をしていて、濃い色の服を着た大変きれいな人だった。マリエが見惚みとれていると、横にいた友人が、

「まあすてき！　すぐおきれいなえ。それになんて素敵なお赤い服なの！　マリエもそう思わない？」

と、うつとりとした表情で言った。

そのとき、わかつてしまった。

マリエにはそのご婦人の服は、濃い灰色にしか見えなかったのだ。

……赤？

「ほんとにねえ、あんなに赤い布があるなんて思わなかったわ。どうやって染めているのかしら」  
そう言ったのは母だ。母もやはり感激した様子で、優雅に人々に手を振る婦人を見つめていた。

ふうん……

けれどいくらマリエが目を見凝こらしても、赤い色は浮かび上がってこない。

実はマリエはその女性を知っていた。いや、正確には本人を知っていたわけではないが、その顔だけはよく知っていたのだ。

なぜならそのご婦人は、彼らの国、エイティス聖王国の女王様だったから。

女王はその頃起きた、第何次だったかの国境紛争で戦う兵士たちを慰問いもんするため、国境近くのソラムの町までやって来たのである。

彼女は女王というには、とても若くて美しい人だった。くるくるした巻き毛は真っ黒。その下の肌はほとんど白に近い灰色。ぷっくりした唇は薄い灰色。そして着ている服は濃い灰色。そんな風にもマリエには見えたのだ。あとでわかったことだが、マリエは髪に関してだけは正しい色で認識していたことになる。女王の髪は、この国では珍しい黒色だったから。

「ねえ、おじいさん。私ね、ときどき人が灰色に見えるの」

あるとき、マリエは思い切って祖父のローランディに自分の見える世界のことを話した。彼は少し驚いていたが、そういうこともあるのだろうと特に騒さわぎ立てはしなかった。

「まあ、マリエはあのエヴァの孫娘なんだからね、そういうこともあるだろうよ。エヴァは変わったものが大好きで、いつも遠い世界に思いを馳はせていた。マリエはエヴァによく似ている。だから大丈夫だ。まああんまり人には言わないで普通にしておいで」

そう言って祖父は笑った。

エヴァというのはマリエが生まれる前に亡くなった祖母のことだ。エヴァはしっかりしているよ  
うで、少し不思議な娘だったからねと祖父は笑い、マリエはその言葉を信じた。不安はなかった。  
ただ、祖父の言うとおり、そのことは人前まへで言わない方がいいのだろうと幼心わがままに理解した。

そしてマリエは知ったのだった。

自分の目——というより感覚は、全く知らなかったり、親しみを感じない人や物に対しては色彩を認識しないということ。

親しみや好悪という曖昧な心の問題を、脳がどう区別しているのかは全く説明できない。だが、少なくとも自分の心の問題だということはわかる。

見る対象がぼんやりしたり、歪んで見えるわけではない。むしろ視力はいい方だった。また、自然物はあるのままの色に見えたから、日常生活においてほとんど支障はなかった。

さらに、最初は灰色に見えた知らぬ物や人でも、慣れたり親しみを覚えたりすれば、徐々に色味を帯びて見えてきたから、とにかく変なことを口走らないように気をつけるだけでよかったのだ。

そして、十歳を過ぎる頃には、マリエはそんな生活にすっかり慣れてしまっていた。

マリエの家は東の国境に近い、小さな地方地主だった。

十歳の誕生日のちようど一か月後に、大好きだった祖父が亡くなった。

少し調子を崩していたところに悪性の流感に罹り、あっけなくこの世を去ってしまったのだ。

預けられていた近所の農家から戻ったときにはすべてが終わっていて、マリエはあんなに自分を可愛がってくれた祖父が、もうこの世にいないことを知った。祖父が死ぬなどとは思っていなかったマリエは悲嘆のあまり、一切の色彩を感じなくなってしまった。父が亡くなったときにはわからなかった悲しみの嵐が小さな心を揺さぶる。

涙のヴェール越しに見える風景は、鮮やかさと美しさを失っている。滲んだ無彩色の風景を、マ

リエはさまよった。きつともう、自分の世界に色が満ちることはない——そう感じながら。

そして、葬式も埋葬もすべて終ってしばらくたった頃、一人の男が家を訪ねてきた。

祖父の若い頃の友人だというその紳士は、マリエを見て悲しそうに微笑み、ぼんやりと見上げるだけのマリエの額にキスをしてくれた。

「遅くなってすまない……ずっと会いたかった……私を許してくれ」

真新しい墓標の前に佇む男の目からははらと涙がこぼれる。涙が青くないのが不思議なくらい澄んだ青い目だった。

初対面のはずだったが、マリエはその人物をよく知っていた。

よく見せてもらっていた祖父のアルバムに一番多く載っている人だったから。

女王様のときにはわからなかった色が、その紳士の瞳にはあった。

「愛していたんだ……ずっと愛しているんだ。ああ……許しておくれ、お前たち。私はなんて遠回りをしてしまったんだろう」

彼はとても悲しそうで、思わずマリエはその紳士の首に抱きついた。「お前たち」が誰のことかよくわからなかったが、そんなことはどうでもよかった。

ただ、その人の悲しみの色は自分と同じで、その腕はまるで祖父の腕のように感じられたのだ。この人を助けてあげたい。

そう思った。

そして再びマリエの世界は色を取り戻した。

祖父の死によって負った心の傷は、年月と共に徐々に癒えていく。

というのもマリエには優しい母がいたし、歳の離れた弟妹はやんちゃ盛りだったため、長女の彼女はよく面倒を見て毎日忙しくしていたからだ。

家は古くからの地方地主だったが、金持ちというわけではなく、むしろ土地や古い屋敷の管理、毎日の畑の見回りと家事で、その辺の農家より忙しく働かなくては家が成り立たなかった。

マリエは地元の学校を卒業したが、進学しようとは思わなかった。

こんな辺境の町でも国境の情勢が落ち着くにつれ、王都からは色々な情報もたらされる。特に鉄道や自動車の発達は、多くの物資や人々を地方に送りこみ、確実に町を変えていった。

このソナムの地にまだ駅はなかったが、工事の計画はほとんど終えているという。多くの人たちはそれを喜んだが、マリエは興味がなかった。

ずっとこのままでいい。

そう思っていた。

時々知らない人が灰色に見えるくらいで、忙しくとも毎日充実していたし、マリエは働くことが好きだった。ずっと仕えてくれている夫婦の一家と共に、食事を作り、畑に出て、狩場を見回った。

少ないが女友だちもいたし、異性の友人もいて、祝祭日には一緒に出かけることもある。国境紛争は過ぎ去り、軍は縮小されて王都は繁栄しているという。判で押したような毎日に不満はなかつ

たが、本を読むことの好きなマリエは、知らぬ土地に対する憧れをずっと胸に抱いていた。

一度くらい旅してみたい。たとえすべて灰色に見えてもかまわなかった。

しかし、この辺境では旅行に行く人も稀だったため、マリエもその願いを口に出すことはなかったし、変わらない日々がずっと続いて行くのだと信じていた。

つまり、マリエにとって、未来は予定調和だったのだ。

あの人に再び会うまでは――



マリエは時々思い出す。

おじいさんが死んで酷く辛かったとき、たった一度だけ訪ねてきた人。色を失った自分に再び色を取り戻してくれた人。

そして、誰かに向けて愛していると呟いた人。

悲しみの渦の中で初めて見えた色は、この人の瞳の青だった。

亡くなった祖父が、この人はおじいちゃんの大切な友だちで、きれいで強くて大好きだったのだと、古いアルバムを開いては繰り返し話してくれた。

色褪せた頁に貼りつけられていたのは、颯爽と軍服を着こなした若い将校。麦酒のジョッキを掲げる陽気な青年。そして、寄り添う祖父母の横で少し斜に構えた美しい人。

それが彼だった。

マリエは、写真はモノクロームなのに、彼の目の色だけは以前から知っているような気がしていた。そしてそれは正しかったのだ。

——雨上がりの空と同じ色だ。

十歳のマリエは、祖父の友人であるヴィリアン・リドレイに淡い想いを抱いたのだった。

ヴィリアン・リドレイは老人だった。

秀でた額にかかる髪は半は白く、目じりにも口元にもしわが刻まれている。しかし、身のこなしや瞳の輝きには少しの衰えもなく、深い声にも艶があった。青い瞳は人を射る輝きを放つ。

マリエが二十歳になったある日、彼は再びソナムの地を踏んだ。

運転手に助けられて黒い車から降り立ち、荒野に続く空を見上げる。

出迎えたマリエを見るなり、驚愕を顔に貼りつけ、次には悲しさとも愛しさともつかぬ奇妙な表情を浮かべて、彼女の祖母の名を呼んだ。

二人の再会はそのように始まった。

それ以降、彼らとはある理由で何度も会って話をするようになる。

ヴィリアンは平原地方の国々の国家事業である、大陸横断鉄道会社の名誉顧問を務めていると言った。

軍に長く在籍し、最後の地位は准将。軍を引退してから久しいのだが、ある事情でもう一度宮仕えをすることになったのだとも言った。

マリエの父も祖父も亡くなっていて、母は長年の苦勞で体調を崩しがちだったから、地所を実質的に管理運営していたのは、二十歳になったばかりのマリエだった。

そんなわけで、ヴィリアンと話をするのは、必然的に彼女の役割となった。

彼はルベール家が昔から持つ、ソムムの町の中心にある飛び地を国に売却してほしいと切り出した。なんでもその土地に跨<sup>また</sup>って、終着点の駅舎が建つらしいのだ。

大陸横断鉄道の東西線はあと一年ぐらいで完成の予定なのだが、終着駅であるソムム駅の着工が遅れているという。駅舎の建つ予定地はたくさん地主が関わっていたため、買収交渉が遅れていたのだ。それでもなんとか買収は進み、残りはルベール家所有の土地のみだった。

マリエと老人は、それから幾度となく話し合いを重ねた。

多くは権利だの地価だのという、事務的な話だったが、そのうちヴィリアンは祖父母との昔の友情や、かつてこの地で起きた大規模な紛争のことを話すようになった。

「こんな話は怖くはないかね？」

戦闘の話聞いて、目を大きくしているマリエにヴィリアンは尋ねた。

「あんまり熱心に聞いてくれるんで、思わず熱が入りすぎてしまった」

「いいえ、もつと伺いたいです。亡くなった祖父がまるで生き返ったように感じられるから」

「そんなにローリーが好きだったのかな」

「大好きでした。祖父もたくさん話をしてくれました。戦争の頃の話も。アルバムを眺めながら」

話によると、マリエの祖父、ローランディは前線でヴィリアンの命を助け、そのあとも戦場を生き抜き、以来二人は親交を深めたとのことだった。ヴィリアンの話は祖父から聞いていたものと少

し違っているところもあったが、マリエは興味深く聞いた。

「アルバムか、じゃあ私も写っておるかもしれないな。よく一緒にいるところを撮られたから」

「はい。きつとそうです。私がヴィリアン様に親しみを感じるのはそのせいです」

「……そうか。そんなことを言われたのは久しぶりだ」

「久しぶり？」

ヴィリアンの様子がいつもと違っていて、マリエは引つかかった。

「ああ、今のあなたと同じように私の話を喜んで聞いてくれた者が、前はいたんだ」

「それはどなたですか？」

マリエは不意に強い興味を引かれた。

「私の孫だよ」

「お孫様？ 私みたいなの？」

「ははは！」

ヴィリアンは突然高らかに笑った。マリエは少し驚いたが、ヴィリアンの笑い声はとても気持ちがいいと思った。

「いや失礼。同じ孫でもあなたとは全然違うんで思わず笑ってしまった」

「違うのですか？ 同じお話が好きだというのに？」

「そうだな……あなたとは全然違う。第一、私の孫は男だからな」

「まあ」

「そう、男なんだよ。それに私の話が好きだったのも、ずいぶん前の……あいつが子どもの頃の話でな……今では、すっかり……」

「すっかり？」

「自分勝手な男に……いや、まだ性根までは腐りきっては……」

ヴィリアンは眉をひそめて考えこんでいたが、次第に視線が隣に座るマリエに向けられてゆく。

「ヴィリアン様？」

「……そんなことは」

「どうされました？」

マリエは、突然自分を見つめて黙りこんでしまったヴィリアンの腕に手を掛けた。老人は、はつと姿勢を正す。

「いや申し訳ない。すっかり考えに耽ふけってしまっておった」

「左様さまようでございますか」

マリエは不思議に思ったが、なぜヴィリアンが奇妙な表情で自分を見ていたかは尋ねずに微笑んだ。

彼は二週間の滞在期間中、主にソナムのホテルに滞在していたが、そのうちの三日間はルベール家の地所じしょに建つ古い屋敷に泊まった。マリエとヴィリアン老人はそれほど親しくなっていたのだ。

二人は馬で荒野こうやを駆けたり、ルベール家が管理する土地を見て回ったりして一緒に過ごした。ヴ

ィリアンは繁栄はんえいした王都エトールと違って、この地方はまだあまり豊かになっていないことに、深い感慨かんがいを覚えたようだった。

二人は土地の話や、世間話を交わしたが、マリエはヴィリアンが時々自分を見つめて考えこんでいることが気になっていた。

そんなとき、彼は決まって最後には首を振りながら、「なにを馬鹿な」「そんなことはありえない」と呟つぶやくのが常だった。だが、やはり気がつくやと厳しい青い目はなにかを望むようにマリエを追っていた。

そうして彼の滞在期間は過ぎ、ルベール家の持つ土地の仮貸借契約かりたいやくけいやくが成立した。

マリエは老朽化した物見の塔を取り壊すことには同意したが、先祖伝来の土地を手放すことを良しとせず、鉄道会社に貸すことにした。今はほとんど値のつかない土地だが、駅が完成し、人や物の行き来が盛んになれば、土地の価値は上がるだろう。その方が、今まとまった額をもらうよりも良いと考えたのだ。

父はいないし、マリエの弟妹もまだ幼かったので、見通しのある定期収入を確保してやりたかった。

そう伝えると、ヴィリアンは幾度か会社に連絡を取っていたが、最後にはその条件を呑んだ。

そして、滞在期間の終わりに驚くべき話を切り出した。彼にしては珍しく、おずおずと口ごもりながら。

それは常に自信に満ちている彼には似つかわしくない態度だったので、マリエは内心少し可笑おかし

かった。

しかし、話の内容は可笑しいどころではなかったのだ。

その話を聞いたマリエが驚くと、ヴィリアンはこれまた珍しく酷く恐縮し、こんなふざけた話はないから、さっさと断つてくれてもよいと額に汗を浮かべて言った。

「少しだけ返事を待つて下さいますか？」

「おお、それは無論」

マリエが答えを探しあぐねている様子を見たヴィリアンは、自分は明日王都に帰るから、返事は手紙でもいいし電話でもいい。無論断つてくれても構わない、そう言つて、彼は慌ただしくホテルに戻つていった。

——なんということだろう。

マリエは生まれて初めて動揺していた。

一大事だった。

一緒に話を聞いていた母アーシアも、弟レストレイも驚いている。幼い妹のユーリエでさえ、事の重大さを察して泣きそうになっているのだ。

土地売却の話しながら、ヴィリアンはそんなことをずっと考えていたのだ。

きつと初めて祖父の話をした、あのときから。

ヴィリアンは真剣な表情で考えこみ、打ち消すように首を振つては、またマリエを見た。おそら

く何度も思いあぐね、苦しんだのだろう。

けれど、私に伝えようと決心されたのだわ。

私と、ヴィリアン様のお孫様を——

自分勝手な奴だとヴィリアンは言った。

けれど、ヴィリアンはその方をとても愛しているのだろう。マリエにはわかった。厳しいことを言つていても、あの目は愛しいものを語るときの目だ。知らぬものが灰色に見えるこの目は、時として真実を教えてくれることがある。

ヴィリアンはその孫息子のことを認めているから、マリエを妻にと望んだのだ。

それに……

マリエは考えた。

もし承知すれば、ヴィリアン様と都に行くことができる。

ヴィリアン様の傍に居ることができる。

マリエは小さな頃からずっと彼を見つめ続けてきた。祖父から聞いた話はすべて覚えてる。

「ヴィーは素晴らしい男だった。強くて、きれいで、俺が女だったら確実に惚れてたなあ」

その通りだったわ。おじいさん、あの方は小さな頃から私の英雄だった。そして今は強くて優しい私の——

自分勝手は私も一緒だわ。

ふ、とマリエは笑った。

その夜、マリエは遅くまで母と話し合った。

けれど、本当は気持ちなんてとづくに決まっていたのだ。

ヴィリアンと話をしながら——いや本当は、彼と再会した瞬間から、マリエは今までとは違うなにかを感じていた。

「母さん、私」

マリエは母を見つめて口を開く。しかし、母にはマリエの言いたいことがわかっていったようだ。

「決めたんでしょう？」

「……はい。ごめんなさい」

「なにを謝るの？ 行きなさい、マリエ。あなたはもうこの家に縛られることはないのよ」

母はそう言った。

「ずっと諦めていたのでしょうか？」

「いいえ。違うわ、母さん。私は縛られていると思ったことは一度もないわ。でも」

一つ呼吸を置いて、マリエははっきりと言った。

「私はヴィリアン様のお孫様に会いたい。会ってみたい」

「ヴィリアン様は正直な方よ。お話はすべて本当のことだと思うわ。それでも苦勞をする覚悟はあるのね」

「私、苦勞はそんなに嫌じゃないわ。ただ見てみたい、知りたいの」

「不思議な子ね……」

母は少し寂しげに首を振った。しかし、行くなどは言わなかった。

「マリエのそんな目は初めて見るわ。念のために言っておくけど、下手をすれば傷つくのはあなたよ」

「はい、母さん。よくわかっているわ。でもごめんなさい。母さんにもユーリたちにも寂しい思いをさせてしまう。家の仕事だって……」

「そんなのはなんとでもなるわ。少しだけ貯えもあるし、人だつて雇える。それにレスリーがいるから大丈夫よ。あの子はあなたに似てしっかりしているから」

「母さん……」

「でも忘れないで。ダメだと思つたら帰つてくればいい。あなたの家はここのよ。それを忘れないで」

「はい！」

私は王都に行く。

王都にいるという、彼に会うために。

家族のことならきつと大丈夫だ。皆この荒野で逞しく生きてきた。信頼できる友人も使用人もいる。

母の手を取つてマリエは頷いた。

「ありがとう、母さん」

あくる日の早朝、マリエは馬で荒野を駆けた。  
これからなにかが変わる——  
予感などではない。  
——それは確信だった。

\* \* \*

ヴィリアンはこの街唯一のホテルの窓から荒野を見渡していた。  
もうすぐここに若い客人がやって来る。

朝の風はすっかり冷たくなった。

秋が深まっている。

最後にこの地を訪れた季節も秋だったか？

あれはローリー、お前が死んだときだったな。

この町は変わらない。

繁栄する都市部とは違い、国境近くのこの町は、中心部に建物が少し増えたくらいで、黄色い山並みも、その向こうの薄青い空も、記憶の中のものと同じ。

ただ——

お前がない。

お前と、あの人と——

リドレイ家は代々優秀な軍人を数多く輩出してきた家柄だ。

四十年の昔、若かりしヴィリアン・リドレイもまた、国境地帯の紛争に志願し、幾多の戦線で戦った。そして彼は激戦地で、一人の男と知り合った。

足に銃創を負ったヴィリアンを助けた男、それがのちに彼の親友となったマリエの祖父、ローラ・ンデイ・ルベールだったのだ。

彼らは年齢が同じということもあって意気投合し、ヴィリアンが王都に戻ってからも親しく付き合った。その頃、ローラ・ンデイは王都の下宿で気楽に暮らしていたが、彼には将来を誓い合った恋人がいた。

それがエヴァ・ワズワースだった。

エヴァは美しく聡明な女性だったが、一風変わったところがあった。

彼女の夢は、いずれローラ・ンデイと共に国境の町に移り住んで、彼の仕事を手伝うこと。貴族の出身だというのに、辺境の地主と結婚することになんの躊躇いもない闊達なエヴァに、ヴィリアンは初めて女性に対して尊敬と憧憬を抱き、三人の友情は固く結ばれた。

やがてローラ・ンデイとエヴァは結婚して二人でソナムの町に旅立ったが、ヴィリアンは軍人の道歩み続けた。

しばらくしてヴィリアンも家のすすめた女性と結婚したが、ローランデイとの友情はそのあとでも続き、ヴィリアンは休暇のたびにソナムの土地まで足を運んだ。そしていつかお互いに子どもが生まれ、その子どもが男と女ならば結婚させて、親戚になろうと約束したのだった。

しかし、ヴィリアンもローランデイも、子どもは息子だけだったから、約束はついに果たされることはなかった。エヴァは息子が成人する前に病で亡くなり、さらに月日は過ぎ、一人息子のフォアバンクスも幼い子どもたちを残して事故で亡くなった。

そして、あんなに頑健だったローランデイも悪性の風邪をこじらせて、あっけなく逝ってしまったのである。

彼らが出会ってから長いときが流れた。

おせっかいな知り合いが、鉄道会社の役員にローランデイとの古い友情の話など持ち出さなければ、引退した自分が辺境まで引つ張り出されることはなかったに違いない。

しかし、どういう巡り合わせか、自分はこの地に再び来てしまった。

つまらぬ役目だが、十年前にローランデイが死んで以来初めてのソナムである。ヴィリアンにとつて、心の友とも言える二人がいなくなつてから、ソナムは遠い土地になつてしまつていた。

それでもなぜか、行かねばならないと思つた。老境に入ったヴィリアンには、社交の趣味がないため時間はある。しかし、彼には重篤な持病があつた。ただ病のことは家族以外には隠してあるし、遅行性で薬もきちんと呑んでいるから、今すぐ命にかかわるわけでもない。断る理由はなかった。

そして――

懐かしいソナムの地で見たのは、親友の恋人。

かつて彼がその想いを封じこめた――

「エヴァ……！」

「それは亡くなつた祖母の名です」

目の前に現れた灰色の目の娘は静かに言った。

祖母に似ていると言われ慣れてきているのだから、特に気を悪くした様子はない。

彼女はローランデイの葬儀の折、泣きはらした目で自分を見上げたかつての幼い少女。

すっかり成長し、女性らしい体つきをしている。

「……では、あなたは」

「孫娘ですわ。マリエンティーナ、どうぞマリエと呼んでください。昔、祖父の葬儀の際にお会いしたかと存じます」

「マリエ……」

ヴィリアンは呆然として教えられた名を呟いた。しかし、目の前の娘は、かつて黄色い荒野を背景に突つていたエヴァにしか見えない。

娘はそんなヴィリアンを見てどう思つたのか、少し頬を染めて微笑んだ。

「はい。祖母を知っている人から似ていると言われたことはありますが、そんなに驚かれたのは初めてです。だって目も髪の色も違うでしょう？」

確かにエヴァの瞳と髪は優しい茶色をしていた。

しかし、その纏う雰囲気、穏やかな声音は、ヴィリアンの愛した、かつてのエヴァ・ワンズワースそのもので――

なんてことだ……なんて……

ああ――

ヴィリアンは娘の肩越しに薄青い空を仰いだ。

ローリィ――

これはなにを意味するのか？

「……見るよヴィィ、こいつこんなに小さいくせに男なんだぜ。俺がエヴァに抱きつくときと睨みやがるんだ」

ローランディの膝の上で、よちよち歩きを始めた息子フォアバンクスが暴れている。

「お前はエヴァにべたべたしすぎなんだよ」

「普通だろ。エヴァは跳ねっ返りだけど、照れるとすっげえ可愛いんだぜ。なあ！ フォン」

「だう！」

「ちよつと！ 聞こえてるわよ」

向こうでエヴァが言い返す。

細い腰に白いエプロンの紐をきりりと締めている。たつぷりとした髪がそのすぐ上まであり、あ

ちらこちらにはねていた。ヴィリアンがエヴァを見ていると、彼女は大きなウインクを返してよこす。

「ローリィ！ ヴィィに変なこと言わないでちょうだい！」

「褒めてるんだからいいだろ！ 君が素敵だって言ってるんだ、なあ！」

負けじとローランディが怒鳴り返した。

「お前……鏡を見てみる。気味が悪いほど鼻の下が伸びてるぞ」

「そうか？ ひげが剃りやすくていいぜ。けど、お前のほうだつて婚約が決まったんだろ？ イ

デテ

息子に髪を引っ張られながらローランディはエヴァに尋ねた。

「見合だけだな。見てくれも気立ても悪くないようだから手を打つことにした」

「そんな言い方は相手のお嬢さんに失礼だぞ。まあ、天邪鬼なお前のことだ。実は結構参ってるな。どうだ？ 凶星だろう」

「さあな。とりあえず跡継ぎを作るのは長男の義務だろう」

「だから、ヤな言い方すんなって！ このひねくれ者！ けど、ひよつとしてさあ」

「なんだ？」

「お前が嫁さん貰って、一年後くらいに子どもができると仮定して……その子が女の子だったら、ちよつどいい感じになると思わないか？」

なにか素晴らしいことを思いついたようにローランの瞳が笑う。ヴィリアンは眉を寄せて尋ねた。



「なにがいい感じなんだよ」

「だって、フォンが二十歳になったとしたら、その女の子は一七、八だろ？ お似合いな年頃じゃないか？」

「馬鹿。女の子確定かよ。それに当人たちの意思はどうなるんだ？ なあ、フォン」

「うおー」

赤ん坊は父親の膝ひざからヴィリアンの膝ひざの上に乗れ移るといふ離れ技を行おうとしている。

「こらフォン、じっとしてろって。……だからさ、夢だよ夢。だったらいいなっていう。でもそうになったらすごいと思わんか？ 俺たちは親戚になるんだぜ？」

「親戚？ 俺とお前と……エヴァが？」

ヴィリアンは驚いたように復唱した。

「そうだよ」

「あらステキ。それすごくいいわね」

大きなケーキを運んできたエヴァが、二人に頷うなづき返す。ヴィリアンはその笑顔から目を逸そらした。

「だが、なあ」

「あ？ そうか。お前んちはエトアールの名門で、俺は地方のしがない地主だから、お前んちの人たちは嫌がるかなあ」

「名門たって、別に貴族ってわけじゃあるまいし、軍人一家ってだけだ」

「そうか？ だったら約束だ。お前の子どもが女の子だったら、俺は腕うでによりをかけて……二人が

恋するようにしむけちゃう」

「あーあ、そうかい。やれやれフォン。お前の親父は、もうお前の将来の嫁さんを決めてるぞ。嫌だったら反抗しろよ。俺はお前の味方だ」

「うえい！」

「あ！ こらお前」

「ははははは！」

「約束だぞ！ やくそく！」

「わかった、わかった。約束だ。こいつらが嫌がらなければな」

「やった！ エヴァ、聞いたか？」

「ええ、確かに聞いたわ。でも、本当にそんな日が来るのかしら。ねえ、ヴィー？」

三十年は決して短い年月ではない。

ルベール家は、かつて彼があやしたローランディの一人息子フォアバンクスも亡くなり、その娘マリエンティーナが母を助けて家と地所じしよを切り盛りしていた。この辺りはずっともと豊かな土地ではなく、昔は何度も砲撃の音が間近せまに迫った。

古い地主であるルベール家の持つ土地は広いが、そのほとんどは痩やせた草原だ。小作人はいても形ばかりの小作料しか課かしていないため、家計は常に火の車だったのだ。

そんな土地で――

二十歳のマリエは使用人と共に家を守り、畑を耕し、馬に乗って地所を回っていた。長い灰色の髪を革ひもで結わえ、男のするような厳しい仕事もその細い身で淡々とこなす。ヴィリアンは、灰色の目にまっすぐに見つめられた。

まずは用件から話してしまおうと、丁寧にかつ慎重に、鉄道会社からの要請を説明する。だがこの大人しげな娘は、交渉ごとになると、厳しさを見せて自分の祖父と同年のヴィリアンと渡り合ったのだった。しかも、その発言は常に家族や地所に住む人たちのことを思っているものばかり。

優しく聡明な娘だとヴィリアンは思った。

けれど、話がふと昔のことに及ぶと、娘は灰色の瞳を輝かせて彼の話に聞き入る。

身を乗り出し、普通の娘ならば恐ろしがるような戦闘や兵士たちの様子を聞いて相槌を打ち、時には熱心に尋ねてきた。

その姿はかつて彼の膝の上に乗って、同じように話をせがんだある人物を想起させた。

マリエと、その男。

少しも似ていないのに、自分を介して二人は繋がっているのだ。

彼は幾度も考え、幾度も否定した。

だが、乾ききったはずの老人の胸にその想いはとめどなく溢れてくる。心を潤し、夢が形になるのを抑えきれない。

そして、彼は決意したのであった。

マリエに伝えてみよう。

「……なんとおっしゃられた？」

「お受けいたしますと申しました。ヴィリアン様」

驚愕する老人の前に、マリエは静かに答えた。

「それじゃあ、あなたは、私のこの理不尽な申し出を受けてくださるといえるのか？ マリ……マリ エンティーナ嬢？」

「はい」

「信じられん……まさか……本当に？」

「本当です。自分で決めたのです」

「母上、あなたの母御はなんと……」

「私の意思を尊重すると申しました」

「おお！」

ヴィリアン・リドレイは、その老いた両手でマリエのよく働く若々しい手を取った。そうして彼女の手を包みこんでしばらく俯いていた。老いたりと言えどもヴィリアンは大きな男だった。だが、その広い肩がかすかに震えている。

「なんと云えばいいのか……本当なら、こうしてあなたに会えただけで満足しなければならぬのに、こんな……だが、あなたはご無理をされているのではないか。哀れな老人の昔話に絆され

て……いや、ひよっとすると企業の圧を懸念されたか……それならご心配には及ばぬ。私は自分の勝手であなたに申し入れただけなのです」

「いいえ、いいえ。ヴィリアン様。私も自分の考えで受けることにしたのです。そこにはあなた様の過去も、このたびの土地契約も無関係です。偽りはございません」

マリエはまっすぐに老人の目を見据えた。かつて鷹のようなだと称された彼の鋭く青い目は、今わずかに潤んで、マリエの灰色の目を見返している。

「私は、あなた様のお孫様、エヴァラード・リドレイ様のもとへ嫁したいと思えます」

ああ、ローリイ。

お前はいつも勇敢で優しかった。戦場で俺の命を救ってくれたときも、まるで落としたものを拾うような当たり前の顔で手を貸してくれたな。

俺たちはよく戦い、よく守った。一緒に王都エトアールに凱旋したあと、たらふく酒を飲み、馬鹿をやった。

あれから何十年経つのだろう。

お前も、お前の息子もすでにこの世に亡く、俺はすっかり老いさらばえ、病を得て余命いくばくもない。

なのに、これはなんの呪いなのだ？

成長したお前の孫娘マリエは、こんなにもエヴァに生き写しじゃないか。

そして、私によく似たもう一人の男がいる。

お前の死にもエヴァの死にも、立ち会えなかった俺は、まだ昔の幻影から逃れられないでいるのか？

触れられるほど近くに、お前の恋人と昔の俺がいるんだ。

ああ、これが俺たちの望みだったのか……

俺はなにか間違えやしなかったか、エヴァ。

君の血を受け継いだマリエを、俺は不幸にしてしまうのではないか。

自分が望んだこととはいえ、これから巡り会おうとする二人の未来にヴィリアンは戸惑いを覚えていた。

### 3 王都の秋、もしくは灰色の婚礼

列車は西へと走る。

ソナムまではまだレールは延びていないので、一番近くの駅、アラインまでは車で行き、そこから西に延びる大陸横断鉄道に乗り換えたのだ。

初めて乗る列車は、車より速くて快適だった。

「驚くことばかりです」

一等席のビロードの椅子を撫でながらマリエは簡潔に言った。この娘はいつも余計なことを言わない。

「ソナムは田舎ですね」

「そうだな……ソナムは昔からあまり変わっておらんのだ。私も若い頃に戻ったような気持ちになっただ」

ヴィリアンはマリエを眺めて呟く。随身はいたが別に個室を取らせたので、この客室にいるのはマリエとヴィリアンの二人だけだ。

「マリエ、私はもしかしてあなたに……」

「大丈夫です」

ヴィリアンの言葉を遮ってマリエは頷く。

「おっしゃりたいことはわかります。でも、私はきつと大丈夫です。無理はしていません」

「……まるでそこにエヴァが座っているみたいだ」

「おばあさん、ですか？」

マリエは笑った。

「そんなに私、老けて見えるのかしら？」

「とんでもない。あなたは瑞々しい若木のようなのだ。それに私の知っているのは若い頃のエヴァだからね。エヴァはどんなに大変な事柄にぶち当たっても、大丈夫だ、平気だと胸を張っておった。そのことを言うておる」

「でしたら、私もそうですわ」

マリエは胸を張った。

「ははは！ あなたが言うなら、私もそんな気になってくるから不思議だ。だが、言った通り、最初はきつと嫌な思いをなさる。私はなんと行ってあなたに詫言ひれば」

「大丈夫です」

マリエは繰り返した。

「ヴィリアン様がいてくださるなら、私は大丈夫です。田舎の雑草は踏まれてもすぐに立ち上がるものですから」

マリエは大丈夫と繰り返し、老人の手を取って力強く頷いた。

窓から見える風景は、どんどんその様相を変えていく。荒野は遠くに去り、すぐ近くまで大きなレンガの街なみが迫ってきていた。舗装された道路には、マリエが見たことのないほどの数の車が行き交っている。街灯の形も洒落ていて、街路樹の手入れも行き届いている。

王都が近いのだ。

エイトイス国の王都エトアールは、平原地方の国々の中でも最も大きな街だ。中心には王宮が聳え立ち、そこから放射状に街が広がっている。

向こうに見える尖塔は、女王が住まうという王宮の一部なのだろうか？ 建物の隙間はほとんどなく、見える範囲ではすべて三階建て以上だ。ここ一帯は電気が通っていて、夜でも明るいという。見てみたいわ。

マリエは飽きることなく車窓の外を眺めていた。変化を楽しむ自分なんて信じられない。都にあるという、大きな市場、図書館、清潔に整備された公園や河川。すべては故郷にはないものだ。

ここでは、どんな人たちがどんな思いを抱えて暮らしているのか。けれど、マリエの視界は無彩色に沈んでいる。ほんの一刻ほど前まで、車窓の向こうはあんなに色彩で溢れていたのに。

さぞ美しいのであろう王宮も、道路も、店も。笑いさざめき行き交う人々もすべて灰色に見える

のは、決して秋が深いせいではないだろう。

自然のものが少ないから仕方がないけれど、灰色に見えるのはマリエがまだこの風景に慣れていないから。

本当は少し怖い。

当たり前だ。生まれて初めて故郷を出て、大都会の見たこともない男と結婚するために列車に揺られているのだ。不安がないと言えば嘘になる。

けれど、今まで当たり前のように日常に甘んじていた自分にとっては、そんな怖さも不安も新鮮だった。

ああ、車輪が一つ回るたびに、私は新しい世界に近づいていく。

それも、ものすごい勢いで。

大丈夫。

私はとても強いよ。

エヴァおばあさんの孫なのだから。お会いしたことはないけれど、おじいさんも、お母さんも、ヴィリアン様もそうおっしゃってくれた。

だから……

待っていて。どんなことでも乗り越えてみせるから。

まだ見たこともない、あなた様――

列車は規則正しい音と共に、灰色の大きな街へと滑りこんだ。

\* \* \*

エヴァラード・リドレイは自由を愛していた。

兄を手伝って経営の勉強をしろという両親に反発し、家を出たのは十五歳のとき。

祖父に倣って士官学校に入学し、優秀な幹部候補生になった。だが、その頃再び勃発した国境紛争で徴兵が始まると、学科を中途で放り出してすぐに入隊。数年間、一般の兵士として山岳地帯の前線に立った。実戦では目覚ましい活躍を見せ、そのまま順調に昇進するかと思えたが、戦闘が収束すると戦わない兵士にはならないと宣言し、さっさと退役する。

士官学校時代に建築を学んだ彼は、その経験を生かして、国家事業として立ち上げられた大陸横断鉄道敷設会社に入った。

王都に戻ってから実家に寄りつかず、用意された宿舍で気ままな一人暮らしをしていたが、突然の祖父の強い要請で、久しぶりに帰宅することになったのだ。

察しのいい彼は、自分の結婚の話だとびんときたが、それが両親からでなく、祖父からの申し出だと知って、渋々ながらも帰ることにした。

果たして、彼の予想は当たった。

久しぶりに会った祖父は、かつての大柄な骨格を残したままげっそりとやつれていたが、炯々と

光る瞳と、他を圧する威厳は少しも衰えてはいなかった。  
長く軍にいたからか常に背筋が伸びていて、上背は自分と変わらないだろう。かつての金髪は今ではまっ白だが、未だ豊かで首の後ろで一つに結わえている。自分と同じ青い目は、家族にさえ和らがないことをエヴァラードは知っていた。それに愛想を尽かしたのか、祖母はエヴァラードが生まれたあと、ヴィリアンのもとから去って行ったという。

「来たか、エヴァラード。相変わらずくでもない生活に身をやつしているようだな」  
声にまで威圧感がある。  
相変わらず大したじいさんだ……

十代の頃、体術で彼に勝てたためしかなかったエヴァラードは、久しぶりに会った祖父の前でひそかに奥歯を噛みしめた。

少し前から、エヴァラードは少々面倒な事件に巻きこまれていた。

持ち前の容貌と才覚で、昔から女に不自由したことのない彼だが、会社の同僚で二、三回会っただけの女におかしな勘違いをされてしまったのだ。

女はエヴァラードと婚約したと周囲に吹聴して回り、憤慨した彼が否定すると、今度は自殺すると大騒ぎを شدしたため、エヴァラードは非常に不愉快な思いをした。すったもんだの挙句、女は会社を辞め、エヴァラードは上司に厳しく叱責された。自分に落ち度はないと思っていたが、周囲にすっきり誤解され、散々な結末を迎えた。

それが家にまで広まってしまったのだ。

扱いくい末っ子にあまり関心を示さず、好き放題させていた両親は渋い顔をしただけだったが、祖父は違った。激しくエヴァラードをなじり、そして今回彼を呼びつけた目的を告げたのだ。

「この恥さらしめ。いい加減な女とばかり付き合うからこうなるんだ。少しはまともになつたらどうだ？」

「だからと言って、会ったこともない女と結婚しろなんて無茶苦茶だろう！　いくら旧友の身内だと言つても」

「だったら会えばいい。会つて話をして気に入らなければ、私だつて勧めん。第一、彼女に失礼だ。お前には過ぎた娘だからな」

「……そんなにいい女なのか？」

滅多に人を褒めない祖父の入れこみように、エヴァラードはにわかに興味を持って、もう一度写真の娘を眺めた。端正な顔立ちをしているが、正面を見つめる表情はどこことなく固く、あまり愛想がよさそうには見えない。

「それはお前が自分で確かめるといい」

ヴェリアンの話によると、娘はすべて承知して国境の町からはるばるやって来たという。にわかには信じがたい話である。エヴァラードも最初この話を聞いたときには、祖父独特のわかりにくい冗談だと思つたくらいなのだから。

「私はすでに後悔し始めているがな。マリエンティーナ嬢にはホテルで休んでもらつていて。理不尽を承知で出向いていただいた。お前の態度次第では私にも考えがあるぞ」

ヴェリアンは苦り切つた表情でそう言うと、エヴァラードの方を見もせずに足早に立ち去つた。

\* \* \*

王都に着いた翌日、マリエはヴェリアンに連れられてリドレイ家を訪問した。迎えた夫人がマリエを見て、「まあ色の黒いお嬢さんね！」と声を上げる。それが義母となるレオノーラであつた。

確かに屋内で行動することの多い都会のご婦人に比べると、毎日外で働いていたマリエの肌は生白くはない。自覚があるから別に傷つかないが、なにも面と向かつて言わなくてもいいと思う。そしてレオノーラに続いて義姉のネリアが「今時なんて古めかしいお召し物でしょう！」と言つたときには、少女がっかりした。着ていた服がマリエの持つているものの中で、一番新しくて上等のものであったからだ。ヴェリアンから貰つた支度金の残り<sup>しほ</sup>で仕立てたのである。

横で聞いていたヴェリアンが二人に向かつて「お前たちは遠方からの客にまともに挨拶することもできないのか！」と一喝<sup>いっかく</sup>してくれなかつたら、もつと馬鹿にされていたことだろう。

普段ヴェリアンは家族とは別棟で暮らしているそうだが、彼の権威は、長男である現在の家長で貿易会社を経営しているパシバルよりも高いようだった。二人の女はムツとした様子で押し黙る。

そしてその横で笑いかみ殺しているのがパシバルとレオノーラの末息子であり、ヴェリアンの孫であるエヴァラードだつたのだ。

ヴェリアンに聞かされていたマリエの結婚相手。

彼は最初、マリエが入ってきてても振り向こうともせず、物憂げに窓の外を見ていた。たいそう背が高く、背筋をまっすぐに伸ばして肩幅が広い。その後ろ姿は祖父のヴィリアンにそっくりだった。マリエが見つめていると、彼は面倒くさそうに振り向いたのだった。

それが二人の出会い。

エヴァラードは瞳に興味と侮蔑を滲ませてマリエを見た。

二人は広い空間の中で対峙した。

——ああ、やっぱり。

マリエは想像していた通りの結果に失望した。心の奥底で、もしかしたらと期待していたのだろう。

彼は見目がよく、淡い色の髪は後ろに流れている。目の色も薄いのだろう。昔祖父に見せてもらった若い頃のヴィリアンの姿によく似て——いや、あの古い写真の青年そのものと言ってもいいだろう。

なのに——

マリエは思わず目を逸らした。

「初めまして。じいさんから聞いているよ。君が俺の花嫁になろうっていう奇特な娘さんか」

エヴァラードはマリエの心中を察したのか、皮肉な笑みを浮かべながら彼女を見下ろした。

それは冷たい無彩色の微笑み。

——彼には色がなかった。

\* \* \*

目の前に大人しそうな地味な娘が立っている。

これが祖父の言っていた女なのだ。昨日、祖父に連れられて王都に着いたばかりだという。

「祖父と君には悪いが、俺は結婚という慣習にあまり重要性を感じていない。自分に向いているとも思えんし」

エヴァラードは机にもたれ、所在無げに部屋の中央に立つマリエをとっくりと眺めた。ついさっき、出戻りの姉に馬鹿にされたときも動じなかった娘を。

彼らは今、リドレイの屋敷の二階、エヴァラードの私室にいる。

写真の印象の通り、真面目そうな娘だ。

ただ髪や瞳は、写真ではただ単に濃い色とと思っていたのだが、実際は珍しい灰色をしていた。ソナムという国境の町からやって来たという。

エヴァラードもかつては軍に所属していたから、国境付近の様子は知っている。あいにくソナムはあまり知らないが、国境の町にはまだこの国に反感を抱く部族や、喰い詰めて流れこんでくる難民たちがいるという。そういう土地で育った娘なのだから、華やかさがないのは当然だ。

じいさんどういふつもりでこんな娘を俺に娶せるために連れてきたんだか。俺の好みとは正反対じゃないか。かつての戦友の孫娘だとかなんとか言っていたが……



「そうですか……」

娘は言葉少なく答えた。

「確かにいつかは身を固めなくてはならないだろうが、俺は良き家庭人にはなれない。末っ子だから、別に跡継ぎをもうける必要もない。けれど祖父はなんとしても俺を君と結びつけたいらしい。あんな態度だが切望しているのはわかるんだ。だから、形だけでも会おうと思った」

娘は黙ってエヴァアードの話を聞いている。薄い灰色の目を少し伏せ、彼のタイのあたりを見つめていた。その表情からはなにも窺えない。

もしかしたら、なにも考えていないのではないか？ あまり気の利くタイプではなさそうだし。

エヴァアードは無遠慮にマリエを観察しながら、たいそう失敬な感想を持った。大陸の国々が出資して設立した鉄道会社に勤める彼の周りには、都会的な美しい女たちが大勢いる。彼女たちと比べると、目の前の娘はいかにも田舎者じみていた。

顔立ちや姿はそう悪くはない。肌も真っ白ではないが、きめ細かく滑らかそうだし。だが、編んだ髪をぐるぐると頭部に巻きつけた一昔前の髪型や、胸元にレースをあしらっただけの立襟のワンピースは、生地は上質だがどうにも堅苦しく、田舎者の精一杯のおしゃれに見えた。

なのに――

さつき初めて自分を見た瞬間、この田舎娘は明らかな失望の色を瞳に浮かべたのだ。母や姉のあからさまな嘲笑にさえ動じた様子はなかったのに。しかし、表情が動いたのはほんの一瞬で、娘は次いで、口元だけで微笑んだ。それがエヴァアードの誇りを酷く傷つけた。

それから、二人で話そうと彼の部屋に場所を移したのだが、灰色の目の娘は不平や不満を口にするわけでもなく、素直に彼の言葉に耳を傾けている。

ならばどうしてこの娘は自分を見たとき、あれほどがっかりしたのだろうか？

都会の洗練された男を見て驚いただけなのかもしれないが、どうもしつくりこない。エヴァアードは女が使う手管は熟知しているという自負があった。

不愉快だ。

エヴァアードは今まで感じたことのない奇妙な苛立ちを覚えた。

なぜ会ったばかりの田舎娘に失望されなくてはならないのか。

舐めてかかるなら、思い知らせてやる、とエヴァアードは心を決めた。

「まあ期待外れというか、期待通りというか、見たままの人のようだね、君は」

「はい」

婉曲な嫌味が通じないことはもうわかった。しかし、あまりに反応が薄すぎる。

「参ったな。こんな純朴そうな女の子と結婚なんて……じいさんも一体なにを考えているんだか」

彼がそう呟くと、今度は明確な返事があった。

「立派なお方だと思いました」

「え？ ああ確かに。その点は同感だ。俺の父は拝金主義の商人、母は俗物だ。だが、祖父は気骨のある軍人だった。俺が唯一尊敬する人物だ」

「はい」

「俺は子どもの頃から祖父に鍛え上げられてきた。だが、聞いたと思うが、彼はもう長くはない。ゆつくりではあるが、悪性腫瘍は確実に進行している」

「伺いました」

「だろうな。君も祖父に同情して、この結婚を承諾したのだろう」

「いいえ、私がご病氣のことを伺ったのは、あなた様とお話を承知してからです」

「なんだって!? 君は全く知らない男との婚姻を承諾したというのか?」

「……そう受け止められても構いません」

「金目当てか? なら、あいにくだが兄貴が親父のあとを継いだから、ほとんどの財産はそっちに行かずだ。あとに残ったものも強欲な姉がかつさうだろうし、俺は自分の才覚で稼いでいない金など欲しいとは思わん。自分が食えたらそれでいいと思ってるからな」

「私も、そうです。生国でもかつかつですがなんとかやっていけたので、それ以上は別に要りません」

訥々と話す様子に偽りは感じられない。これでも人間観察には自信があるのだ。

「ふうん。ならばますます理解できんな……昔の戦友と交わした約束とはいえ、会ったこともない俺と君を結びつけようなどと……」

「あの方にはあの方の深いお考えがあるのだと思います。詳しくは何っておりませんが、私はヴィリアン様のその気持ちに心を打たれました。生意気に聞こえたら申し訳ないのですが、あなた様と

結婚する理由を強いて挙げるなら、そういうことだと思つて欲しいのです」

「……」

今までで一番長く喋つたと思つたら、ほぼ祖父に関する言葉である。なかなか変わった娘のようだった。だが、少なくとも、うるさくあれこれ言うタイプではなさそうだ。

結局のところ、妻にするならこんな風に淡白な女がいいのかもしれない。従順で贅沢を言わない平凡な女。

「君はそんなことを考えてここに来たのか? 変わっているな」

「かもしれません。でもヴィリアン様は深い考えをお持ちなのです」

「ふん……だが、君がそんな気持ちで俺の妻になるというのなら……まあいい。そう言うことなら」

エヴァラードはつかつかと部屋を横切つてマリエの傍に立った。

「結婚しよう」

平坦な声だった。

「はい」

「俺もまあ世間で言うところのいい歳だし、すすめられた女と身を固めて、祖父が喜ぶならそれでいい。それに、面倒な女たちが寄ってくることも少なくなるだろうし……いや失礼」

そう言つてエヴァラードは、肩を竦める。

まずいことを言ってしまった、と彼は視線を避けた。

## 立ち読みサンプルはここまで

\*\*\*

マリエは静かに長身の男を見上げる。

「……いいえ」

エヴァラードはわざと気持ちを押さくような態度を取っている。マリエにはそれがよくわかった。彼は自分のなにかもが気に入らないのだろう。

「こういう言い方は、君にはとんでもないように聞こえるかもしれないけれど、祖父はあと一年もたないと思う。あの人の剛毅なところはそれをすべて受け止めて、なおかつああいう風に泰然自若としてる点だな。だから……こうしよう」

「はい」

エヴァラードの冷やかな目つきは、とても求婚している男のものではない。夫となる男はなにを言おうとしているのか。マリエは身を引き締めて待つ。

「この婚姻は祖父が身罷るまでだ」

マリエはその言葉を全身で受けとめる。きっと彼は、自分を見極めようとしているのだ。

「俺たちはその間だけの夫婦になる。偽りの」

「それは……」

マリエの灰色の目にかすかな非難の色が揺らめいた。だが、エヴァラードにはそれがどれほど稀

